

大妻女子大学紀要―文系― 第四十二号、二〇〇九年三月

『諸家小伝録』に見えたる人々

一、はじめに

江戸後期から幕末にかけての狂歌作者については、群衆作家とみなされていることもあってか、今もって狩野快庵氏『狂歌人名辞書』（文行堂・広田書店、昭和三年）に頼らざるを得ない場合が少なくない。また同書にて努めて典拠を示そうとされた同氏の配慮には、さらに詳しい伝記内容が知りたい場合など実に有益で感謝に堪えないものがある。しかしそうした典拠群の中には、私などにとつては未見の書物がまま交じっている。『諸家小伝録』しかり、『通称録』しかりである。

さて先頃、畏友・服部仁氏より右の『諸家小伝録』の所在を知っているか、との問い合わせがあった。閲覧した記憶がない旨を答えると、近時の高橋章則氏『江戸の転勤族―代官所手代の世界―』（平凡社選書、平成十九年）に紹介されているとのご教示を得た。手元の同著を急ぎ再読するに、初編（初会）が福島県立図書館蔵、第四編から完結の九編までが仙台市博物館阿部次郎文庫蔵と見えている。残念ながら第二、三編の所在は不明のようだ。ここに至って、架蔵本の中にも同じような書名の一冊があったことを思い出したので取り出してみる

『諸家小伝録』に見えたる人々

石 川 了

と、何とその欠けている内の第三編だった。内題を「狂歌小伝録」というこの一冊は、原題簽に「諸家小伝録」とある。狂歌本として内題の記憶はあったものの、分野を特定していない外題はすっかり失念していた。念のために高橋氏同様、改めて国文学研究資料館の日本古典籍総合目録データベースを検索してみると、新たに徳島県立図書館森文庫にもその第六編一冊が所蔵されていることが追加されており、同資料館の日本古典資料調査データベースには、その森文庫本調査カードも公表されていた。結局、第二編のみは所在不明ながら、その他は全編にわたってその原本調査を行うことができた。

二、書誌解題

初めにお断りしておくと、所見各編いずれにも序・跋・刊記がなく、挿絵もなければ全丁にわたって匡郭もない。参考までに菅竹浦氏『狂哥書目集成』（星野書店、昭和十一年）を見るに、「諸家小伝録中（本）九（冊） 檜園梅明（撰） 同（天保九）年 江戸・檜垣連」とある（刊年については次章で述べる）。内容構成は各編とも、原本には名称記載がないものの私に名付ける「月並狂歌集の部」と「小伝集の部」から成る。そのどちらが先に配されているかは編によって異

なり、かつその両部いずれにも冒頭書名があり、また月並狂歌集の部には末尾書名が記されている編もあるので、便宜上その冒頭書名すべてを内題と呼び、各末尾書名すべてを尾題として扱う。

月並狂歌集の部は所見本各編すべて、先に檜園(竜の門)梅明撰の部があり、その後に蓬萊居亀世撰の部が配置される二部構成となっているので、撰者は梅明単独ではなく、厳密に言えば梅明と亀世の二人である。また編者名が明記されていない小伝集の部における所収狂歌作者数については、ひとまず編単位での延べ人数を付記するが、一部には記述内容が異なる重出者もいる(次章「小伝集の部」では、後述する三桁番号を以て重出者をも補記した)。総編数は確かに全九編ながら、その第八、九編は合併編なので冊数としては全八冊(合冊の仙台市博物館本には、冊単位で原装の角裂れが残っている)である。

以下に各編の書誌を列記するが、柱刻の「(印)」とは檜垣連の「以」を指す。また原本未見の第二編(会)については、その番付(梅明・亀世撰、天保九年十一月十六日春友亭披露)が東京都立中央図書館加賀文庫蔵「狂歌番附」七十枚中にあることを、高橋氏が前掲著の中で紹介されている。なお本文は全編すべて、月並狂歌集の部と小伝集の部ともに半丁十一行である。

初編 中本(縦一八・〇糎×横一二・三糎)一冊。福島県立図書館蔵。図書請求番号「九一一・一九/K五」。

原表紙…淡香色布目地に薄茶の横刷毛。

原題簽…双枠内に「諸家小伝録 壺」。

字 高…一四・七糎。

本文…①月並狂歌集の部(檜園梅明撰、蓬萊居亀世撰)

内題「諸家小伝録初会」。

尾題 ナシ。

柱刻「(印)小伝 丁付(一〇二二一)」。

※末尾に宝亀園主人撰「当座」を付す。

②小伝集の部(所収狂歌作者延べ十三名)

内題「諸家小伝録」。

尾題 ナシ。

柱刻「(印)小伝 丁付(伝ノ一、伝二〇伝五)」。

二編 原本未見。

三編 中本(縦一八・〇糎×横一二・四糎)一冊。架蔵。

原表紙…淡香色地に薄茶の横刷毛。

原題簽…双枠内に「諸家小伝録 三」。

字 高…一五・〇糎。

本文…①小伝集の部(所収狂歌作者延べ十三名)

内題「狂歌小伝録三会」。

尾題 ナシ。

柱刻「(印)小伝 丁付(伝一〇伝七)」。

②月並狂歌集の部(竜の門梅明撰、蓬萊居亀世撰)

内題「諸家小伝録三会」。

尾題 ナシ。

柱刻「(印)小伝 丁付(一〇二二一)」。

※末尾に水遊園大人判「当座 難波冬」と宝市亭大人判「同 都春」を付す。

【四編】九編 中本(縦一七・八糎×横一二・〇糎)合一冊。仙台市博物館阿部次郎文庫蔵。虫損が目立つ。図書請求番号「阿/二二二」。

四編 中本一冊。

原表紙…淡香色地に薄茶の横刷毛(ただし第何編のものか不明)。

原題簽…双枠内に「諸家小伝録」とあり、これ以下破損。

字 高…一四・七糎。
本文…①小伝集の部（所収狂歌作者延べ十八名）

内題「狂歌小伝録四会」。

尾題 ナシ。

柱刻「(印) 小伝 丁付 (伝一ゝ伝七)」。

②月並狂歌集の部（檜園梅明撰、蓬萊居亀世撰）

内題「狂歌小伝録四会」。

尾題「狂歌小伝録四会終」。

柱刻「(印) 小伝 丁付 (二ゝ二十一)」。

※末尾に檜珍主人撰「当座 江戸春」と加茂の屋主人撰「同 初鯉」を付す。

五編 中本一冊。

字 高…一四・八糎。

本文…①小伝集の部（所収狂歌作者延べ十四名）

内題「狂歌小伝録五会」。

尾題 ナシ。

柱刻「(印) 小伝 丁付 (伝一ゝ伝七)」。

②月並狂歌集の部（檜園梅明撰、蓬萊居亀世撰）

内題「諸家小伝録五会」。

尾題「狂歌小伝録五会終」。

柱刻「(印) 小伝 丁付 (二ゝ十七)」。

※末尾に「四会落板之分」を付す。

六編 中本一冊。

字 高…一四・六糎。

本文…①小伝集の部（所収狂歌作者延べ九名）

内題「狂歌小伝録六会」。

尾題 ナシ。

柱刻「(印) 小伝 丁付 (伝一ゝ伝五)」。

②月並狂歌集の部（檜園梅明撰、蓬萊居亀世撰）

『諸家小伝録』に見えたる人々

内題「諸家小伝録六会」。

尾題 ナシ。

柱刻「(印) 小伝 丁付 (二ゝ十六)」。

※末尾に「追加野原」に次いで、「小伝録六会目四首合点甲乙録」二丁半（柱刻ナシ）を付す。

七編 中本一冊。

字 高…一四・八糎。

本文…①小伝集の部（所収狂歌作者延べ十一名）

内題「諸家小伝録七会」。

尾題 ナシ。

柱刻「(印) 小伝 丁付 (伝一ゝ伝五)」。

②月並狂歌集の部（檜園梅明撰、蓬萊居亀世撰）

内題「諸家小伝録七会」。

尾題 ナシ。

柱刻「(印) 小伝 丁付 (一ゝ十五へオ)」。

※末尾に檜の屋大人撰「当座 短冊売」と「当編追加」に次いで、「小伝録七会目四首合点甲乙録」二丁半（柱刻ナシ）を付す。

八編 中本一冊。

字 高…一四・六糎。

本文…①小伝集の部（所収狂歌作者延べ二十三名）

内題「狂歌小伝録八会」。

尾題 ナシ。

柱刻「(印) 小伝 (伝一ゝ伝十)」。

②月並狂歌集の部（檜園梅明撰、蓬萊居亀世撰）

内題「諸家小伝録九会」。

尾題 ナシ。

柱刻「(印) 小伝 丁付 (一ゝ三十一終)」。

※末尾に宝市亭大人撰「当座」に次いで、蓬萊居大人、

面堂大人、梅屋大人の各撰各数首を付す。

六編 中本（縦一八・一糎×横一二・四糎）一冊。徳島県立図書館蔵

文庫蔵。図書請求番号「W九一一・一／モキ」。

原表紙…淡香色地に薄茶の横刷毛。

原題簽…双杵内に「諸家小伝録 六」。

字 高…一四・五糎。

本文…①小伝集の部（所収狂歌作者延べ九名）

内題「狂歌小伝録六会」。

尾題 ナシ。

柱刻「（印）小伝 丁付（伝一／伝五）」。

②月並狂歌集の部（檜園梅明撰、蓬萊居亀世撰）

内題「諸家小伝録六会」。

尾題 ナシ。

柱刻「（印）小伝 丁付（二／十六）」。

※末尾に「追加野原」に次いで、「小伝録六会目四首合

点甲乙録」二丁半（柱刻ナシ）を付す。

三、小伝集の部

所見の小伝集の部には延べ一〇一名（重出分を除けば実質八十一名）の略伝が記載されている。今改めて原本についてみると、『狂歌人名辞書』には多くはその詳細が省略されている各人の家業、居住地等その他、狂歌作者としての経歴、特に判者となった時期を含む折々の年齢に言及することが少なくない。この一事を以てしても、ここに紹介する意義は決して小さくはあるまい。

撰者の檜園梅明については、初編に「105高殿梅明」（算用数字については後述）の別号でその小伝が見えており、「年甫四十六歳」とある。本書にはこの「年甫何歳」という表記が散見されるが、これは本

書成立（刊行）年頭における年齢と思われる。梅明は四世絵馬屋額輔稿本『狂歌奥都城図志』によれば、安政六年十一月九日享年六十七歳で深川の西光寺に葬られているから、逆算すれば四十六歳は天保九年ということになり、本書原本には年次記載が皆無ながら、前引『狂哥書目集成』にいう刊行年と一致する。さらに第三編「310菊安」には「今年天保九戌年」とあり、同「302善野真袖」にも「当戌年」とある。しかし第九編「811釈 照信」には、「今年天保亥の夏、旱天に雨を禱りて験ありとぞ」とあるので、少なくともこの最終合併編は翌天保十年夏以後（おそらくは同年中）の刊行と思われる。なお、いま一人の撰者である蓬萊居亀世については、未見の第二編に入っているのか見当たらないが、『狂歌人名辞書』には「亀世」で立項されており、下総関宿藩士で東都常磐橋内藩邸に住んだといい、その弟ならば初編に「106津多井万世」として見えている。

以下に第二編を除く、初編から八編までの各小伝集の部のみを翻字するが、二部伝存する第六編は虫損のない徳島県立図書館本を底本とした。なお、私に小伝者に編単位で算用数字三桁の通し番号（百の位が編数を示し、八編のみは便宜上それを「8」で表記）を付すとともに、濁点と句読点も私に施した。また梅明もしくは亀世の批点が付された引用狂歌は、その批点を省略して歌のみを鍵括弧内に収めた。末尾に参考資料として小伝者の国別一覧を付す。

【初編】

101緑 千条（509）

名は恒徳、通称伊藤常吉。陸奥仙台の府下双鳥街に住し、菓種を鬻て業とす。数百年の旧家たり。其性、清潔廉直温和にして衣食住の三つを戒め、食物の美悪多寡をいはず、衣服は絹帛を用ひず、居室は壮麗をなさずといへども、家庭の掃箒を好む。酒色を好まずたゞ好んで茶を喫す。温和なる事は、家族童僕たりとも其怒色を見たることなし。廉直なる事は、一とせ睦友何某と旅行の事ありしに、ある時何某千条

にいへるは、子は平生儉約なる人と思へりしに、さもあらぬはいかなる事といふに、千条そは何故といへば、何某曰、子の食事を見るに、旅宿にては三椀に過ずして昼食の数椀に及べるは、是則儉約にたがへるならずやと。千条笑曰、子が言大に違へり。旅宿の価は一宿何程と定まりて、椀数をもて価を云ず。是を多く食せんは貪るにあらずや。又昼食は是と異なるにあらずやといへば、何某口を閉ぬとかや。此一事をもて清潔廉直なるをしるべし。又狂歌をこのみていかなる危急闢卒の間にても、一日なりとも歌よまぬ事なし。或時陸奥山なる弁財天に詣でんとて渡海せしに、折節雨風烈しく遙の大洋へ吹出されぬ。かゝれば船中の人々あわてまどひ、今や此舟くつがへりもやせんと騒ぎのゝしる中に、千条「人すまん嶋根もあらぬわだ中になみの立ゐはひまなよりけり」とよみ出たれば、いかなる事にかありけん、風さへ吹やみほどなくみちのく山に着ければ、人々挙て其大器なるを感じあへり。又ある年の秋、野なる草花を庭にうつしうゑて「野のけしきうつし植てもあら野とはいかであらさん庭の八千ぐさ」。此外咏吟あまたありといへども略す。千柳亭を師として別号を千菊園、又、金葉園、東籬亭、柳別家と号す。又梅を愛して梅林軒、清容子等の号あり。又狂歌を好むといへども業用の妨ならん事をおそれ、あへて歌よむ事を人にしらせず、妻子僮僕たりとも歌よむ事を見たるものなしとぞ。又仁慈陰鷲の志ありて、衆民を恵ん事を思ふといへども、糊口の資あるのみにて錢財に乏しく、其志の及ばざるを憂ふ。

102 檜集園明居 (303・418・819)

下総国関宿の藩士。世々重職に居す。氏は富岡、名定功、年甫廿歳。別号富の門といふ。文政の末、時雨の秀吟ありしより狂歌を詠ず。時に十三歳たり。初号を香文舎といふ。年有て天保八年、檜垣側の判者に列す。常に甲州流の軍学を好み、平生七書に眼をさらす。鎗砲を学て其妙にいたるといへども、其志すところは専兵学にありと云。「わだのはらみやこの鄙かふく風にうちよる浪のこゑのたえしは」「卯花

のさきのさかりは浪よせつ庭のまがきも鳥と見るまで」。

103 秋夜長樹 (814)

和泉国堺の住。氏は尾崎、名は正明、号和群居、又、蓼居、和一園別号あり。代々商家たり。能歌を詠じ左伝を尊ぶ他に好事なしといへり。「露さへにおきそはりけりはかなさのさてあるべきを朝がほのはな」。

104 吾妻春郷

北総結城の人。椿園長住の長子なり。文政十一年冬、父長住の教に随ひ始めて狂歌の道に入る。其後天保三辰の冬、橘の貞邦に随ひ和歌を学ぶ事三十日、後尚師を求めずして独其道をつとむ。適又興歌を詠じて水魚喚友の間に遊ぶ。別号麗日園、又、桜舎、樺園、楡莢、雨庵、東風子などいへり。姓赤荻氏、名義徳、字数功、又、号仙風。年甫廿八歳。「天地とともにさかゆく不尽の嶺は千とせとかぎる松だにもなし」。

105 高殿梅明

東都長谷川街に住。姓源、氏田中、名友直。文化末より狂歌を嗜み、其後花園側に遊びて春友亭と云。判者に列す時、檜園と改号せり。水魚連の魁首にして檜垣連の長たり。別号竜の門、官生居、初瀬山人、檜原山人。又生をえたりし時より左のたのひらに大きなほくろ有によつて、握星子、掌星子の号あり。年甫四十六歳。「高がやはうへ刈萱はゞかるかやにあらぬを名にはなどおほせけん」。

106 津多井万世

下総関宿の藩士。名は旧友、蓬萊居の弟なり。常に兄の教をうけて歌を詠ず。又事につき時にふれて俳諧のほくを讀の外好む事なしとぞ。「異国のゆふべおぼえて西の海なみのつゞみをうたぬ日ぞなき」。

107 桂 花門

姓は平、名は程郷、通称丹治銑右衛門。下総国光嶺の住。往昔、関東丹治の一党たり。故有て慶長の末より当嶺に住し、官匠を以て家の職とす。鳳鳴翁の門に遊びて玩月楼、鳳梧園、規矩庵等の号あり。富貴を悪みて清貧を楽しむ。数学を好むといへども、円法のまろきを貯ず。此人哥姪の癖ありて、千金を積といふとも、一首の秀逸などは飲ばずとなん。「見し秋の露のまだひぬ草の葉にとく霜みせて冬は来にけり」。

108 国 史園

諱良幹、一号広胖堂、白井氏、常陸玉造の医家。東都の医官杉本先生の門に業を受。傍、朝川善庵の教を受、儒典を学ぶ。帰郷の後、刀圭の暇俳諧歌を詠ず。麻生連の判者たり。「御仏にのちの契りはいのらなん命を神にかけてあふ夜は」。

109 見奴琴喜吉 (306・703)

武蔵国小川里住。世々太物類を商ふをもて業とす。氏は大沢、号を沢泉舎といふ。文化十三年の産なり。故に其名を十三郎と通称す。狂歌は本町側花の屋に学び秀吟多し。只いとまある時は酒を好、大盃をかたづけはかりなしといふ。「あだにのみたちし夜頃のおもかげにわかれてこよひあふぞうれしき」。

110 国翠園繁樹

常陸国麻生の藩士。通称与市太郎、姓平、氏手賀、名幹幸、字子竜といふ。父国字歌垣に幼時より学びて俳諧歌を詠。依て俳歌堂の別号あり。「あふ夜は、嬉し涙のしぐれしつまぐらの山も色づかんまで」。

111 和学真名富 (704)

出羽国天童の藩士。姓藤原、氏吉田、名守貞、通称専左衛門。俳諧歌は文化四年十五歳、東都に遊て四方歌垣真顔宗匠の門に入て始めて詠

ず。号を文歌堂とよぶ。同八年執事都講に加はり同十三年判者に列し、其後歌垣の号をたまひけり。今此門下に遊ぶ人多しときこえたり。時に年甫四十六歳。「雨風を通さぬばかり若葉しつもの山の名もうつもれぬべし」。

112 榎柱亭寄躬

小出氏、姓は源、名は美直。榎の屋の門に入て狂歌を詠ず。性温厚にして人とあそはず。只草花を愛して、春は菜畦に培ひ秋は菊園に灌ぐ。其作の嗜好才芸多しといへども、独心をやるのみにして言外にあらはさざれば、其能を知る人すくなし。「神まつる卯月来ぬればうの花のいがきが外もにほふしらゆふ」。

113 袂 広好

姓は源、氏は川佐、名は宜固。武蔵国忍の藩士にして、東都下谷の下邸に住す。初、一田窓に順て戯歌を詠じ包嬉園と云。後、三世浅草庵の門に入て判者に列し浅裏庵と号す。栞の門、水穂の屋の別号あり。常に鈴屋翁の卓見、漢籍に詔らばざる高論をよろこび、其書をよむ毎に不知不覚感歎の声を発するに至る。又嬰兒を愛して其笑顔をみれば、急遽の時といへども抱かざればゆかず。且草木の花を愛して春山秋邨に遊吟す。ある時、野に出て撫子のさけるを見て、「末の子のこゝちせられて秋さくはあはれぞふかきなでしこの花」。

【三編】

301 守川捨魚 (510)

姓は藤原、名は捨魚、至清堂また永言堂と号す。今東台北麓の根岸に住す。よりて都鶯邨夫の別号あり。文化乙丑年甫十一、先考とともに狂調を詠ず。先考、作名は面成砂楽斎と号す。此道にあそぶ事、纔に四年にして文化丁卯十一月没す。然れども佳作多し。文化丙寅、故千秋庵月次会再興のとし、橋納涼をよめる哥に、あつさにはしつけられ

たる不行義も親父橋にて直すすゞしさ。又六樹翁退隱の後、はじめて寄恋の題にて哥をえらばれける時に、うらむぞよそへ心をかけ茶碗今さら我を二のつぎにして。此余の佳作多しといへどもこゝに贅せず。捨魚その氣韻をうけて詠哥に耽るといへども風体は頗ることなり、池氷をよめる哥に、「鏡なす氷何なり翁草影もとゞめぬ大沢の池」。また雪ふりける日、野べをみやりて「白からぬ花こそなけれ打わたすをちかた野べの雪の梢は」。

302 善野真袖

下野国都賀郡栃木の住。商家。号通環亭。当戌年、齡二十六歳。家職暇ある時は狂歌を詠じて楽みとす。秀吟甚多く其名四方に聞ゆ。おり／＼大江戸に遊びて雅友おほし。海山をへだてたるには和泉堺の和一園、伊勢津の荻の屋、風交尤ふかし。「吹風に柳はまかせその影は柳につれてうちなびくかな」「君ゆゑにくしけづりしも今はたゞ髪さかだて／＼うらみぬる哉」。

303 富田明居 (102・418・819)

紫の筑波嶺も紅に光る二荒山も不尽の嶺とおなじう白妙になりける冬の末の頃、利根の川風寒きあした、下総国関宿の里檜集園のあるじ冬籠りの心なぐさめばやと、庭のさうじおしひらかせてうち見られければ、程近き春待顔に軒端の梅の苔ふくらかなる枝に、夜べの村雨のなごりの雫おちもやらずありけるを見て、筆とりあへず「鶯の涙と春はとけぬらし寒さに氷る梅のしづくも」。かく口ずさび、はしゐしてむかひの野べをながめらるれば、秋はいろ／＼の花咲し千種百草跡なく、たゞ霜の花のみ咲いでたるはさう／＼しく、野守の鏡と見し沢水も、流れなう白がねの板うちのばへたらんやうにみえければ、「濁さじと冬は氷るか大君の若菜あらはん野辺の沢水」。かくよみける冬の日も、はやかすみながるゝ空のどかなる春の日の夕、四方の山風あた／＼けく野べは若くさ髪ゆふべくなりゆき、若木老木の桜、時しりがほに咲出

たる庭の花ざかり、つくば嶺おろし梢うごめかして見る間に庭の面かはりゆきけるををしみて、「かたはらをさらじとおもふ我をおきてよそへ桜のちりゆくがうさ」。かくよみけると聞えつる。明居ぬしは今世の人の下手につくまじき上手のよみ口になん有ける。

304 神風音信

伊勢津の人。別号荻屋また浦園と号す。いまだ総角の頃、人の判者披露てふ事をすゝめたるに、音信こたへけらく、判者は判者にして判者にあらず、求むる人の判者なれば、自判者になりたらんにも猶誠の判者にあらず、とていなみしとぞ。今や人ゆるして判者列に加ふ。けふ判者の中の判者とは、此人をやいふべき。「斧をさへ用ふばかりになりけり今はた松の二葉ながらに」。

305 梅里

阿波国徳嶋市場町住。商家なり。質、油、荒物、小間物を世の営とす。通称上郡屋善作といふ。性廉直にして富不貪貧不愁、業体のいとまあるときは狂歌をよみて楽とす。文化年中浪速連一字亭を師として、学号を一枝亭といふ。東都檜園の撰に出して手柄多し。ある時、片恋といへる題をよめとありければ、「なげくよな片われ月も満る世にあはで恋路のやみとなる身は」。

306 沢泉舎喜吉 (109・703)

武蔵国小川の里、大沢ぬしは人のゆるしたる風流雄にて有けり。いつの頃にかありけん、やよひのはじめ友だちふたりみたりとひ来て、をきわたりの花見にいざ、とうながしければ、檜割籠に竹筒など供のやつこにとりもたせて、そゞろに花あるかたをうかれありき、ある桜がもとに敷もの取ひろげ、喜吉は日ごろ好める大盃を数かたぶけて、酔ごゝろをかしう春の日の長きも心あかずながめありきけるに、日は西山の端にかたぶき、遠山寺の鐘の音ほのかにきこえ、夕の風桜の梢を

うごめかし、今や花のちりかゝらましう見えければ、躬恒朝臣の、けふのみと春をおもはぬ時だにも立ことやすき花のかげかは、といへる歌をおもひつゞけて、「立やすき花の陰かなちることのなげきにけふはあはじとおもへば」。かくよみいで、心はげましかへりけると、友だちかたり伝へけるとかや。

307 堀田俊豊

美濃国岐阜金花山麓、花岳楼は文政七申年より狂哥道に入、同十三子年、故西来居の門に入。初号木瓜園規磨といへり。其後、瓢蔓守と改号す。△翁死去の後天保三辰年、在浪花神歌堂の門に入て神垣内俊豊と改号、同五年冬判者の列に加はり、同時水魚連に入。勤務のいとまある時は茶事を好むの外、狂歌怠る事なし。然れども生得愚にして秀吟なし。此たび高点を得て自ら如夢中。「立ことのかたきや何ぞ花かげにあかぬ心はのこしおけるを」。

308 山路菊寿躬

通称佐藤沅水。代々新発田の藩医たり。齡、初老にいたる。文政の初年より和学に志し、檜園に随順して専ら狂歌を詠ず。当時、檜垣連の判者に列す。英名遠近に響き門人頗多し。業職もとより閑暇を得ざれば敢て多芸をもとめず。草種園、又、籬亭と号す。近來師より賜はりて別に千代廼門と号す。「咲がてにまたする花よちる時もかくいそがすはうれしからまし」。

309 正 樹

和泉国堺の住。中尾正信。詠歌、謡曲、雑芸を好む。和一園の垣内にして老実人に超たり。「日にそへて風ものどけくなるまゝに今はと花の咲や出けん」。

310 菊 安

陸奥信夫郡大森住。染物を世々の業とす。氏熊坂、通称代助と呼ぶ。故千庵庵翁の門に入て狂歌を詠ず。柳燕亭と号す。判者に列する時、藍白舎と改む。翁没して後は、鈍々亭和樽大人に隨身して久しく詠吟す。鈍々亭没後はしばらく休詠したるを、天保七申年夏より檜園、蓬萊居に風交して再吟す。今年天保九戌年、齡六十三才なり。「なごりなく梢ちる日は桜花木かげぞ咲のさかりなりける」。

311 秋 良

飛驒国高山住。塩、糸、紬を商賈するを業とす。氏は坂田、名は信胤、字槐吉、通称長亮と呼。好て狂歌を詠じ竜兆園と号す。又、鬼宿、雅鼻山人、氷台主人等の別号あり。花押㊦を用ふ。宅辺に多く蓬を植置を以て、人自ら呼て四方芸屋といふ。和漢の書を読、糸竹をたのしむ。田中大秀先生に随て和歌の道を学ぶ。また赤田臥牛先生に遊て詩文を苦心す。唯をしむらくは手跡にうとし。家系は往時当国の主、金森侯の家臣阪田長造。今、俗肆に居す。天保八酉年夏、東都檜園に隨身して再世の師と頼。斎竜社の魁首たり。社号自より始とす。「もみち葉の木かげあかるく照らせるはよるをも昼につぎてみよとか」。

312 呉竹直喜

天性温和にして常の道をよく守り、枉れるをにくみ直きを悦ぶゆゑに名とす。諸人にしたしめども心をゆるさず、唯古人を信友とす。又仏道を尊み慈悲を専にす。然りといへども強を挫き弱を助く。又唄物に妙音ありて、みづから流行の小唄を作りてたのしむ。長唄は岡安の節をうたひ、浄瑠璃は三門ともに流を汲て学べども、座興のみにてしひて好まず。たまゝ美音を発すれば、聞人あかずしてやむるをゝしむ。また俳諧は鳩来庵社中白鳥連に入て藁宇と呼ぶ。一時に一千句を吐とも、童女さへものすれば曾て益なしとて好まず。歌道は三代集の舐格をしたひて学び得たり。文政の末より至清堂の門に入て遊ぶ。山桜連

の連長たり。人物誌、作者部類、百人一首、五十人一首等の狂歌集に出たる秀歌を見て、此人の俊傑なることをしるべし。しかるに六七年以来、世務に暇なきを以て休詠せしを、今ふたゝび詠出す。秀吟少なからず。またたぐひなき当座の達吟にして、筆者の机辺をさらす。他人一首を詠すれば十首を詠じ、他人十首を詠すれば百首を詠す。故に甚手柄多し。諸側集冊を見てしるべし。琅玕園、上林亭、清花居、山桜垣等の諸号あり。常に人に語りていへらく、世間の道芸多端なりといへども、此道に過たるものはあらずといへり。「よしの山しをりはなさじ花ゆゑにふみまよへるはをかしからまし」。

313 輝 雄

東京都橋常磐町に住す。氏伏見、通称吉造。好て狂歌を詠じ、日夜歌学に眼をさらすの外他事なし。年齢二十有二歳。号を瓊舎といふ。「いとはやも雪はけにけりよごるゝを厭ふや清きならひなるらん」。

【四編】

401 加藤琵琶彦 (606)

尾張国名古屋古渡に住して、世々商家たり。屋号を升屋、通称を利吉とよぶ。狂歌を好んで、側判者たり。玉水連を唱ふ。其門下に遊ぶ者甚多し。滝屋、便々居の号あり。和漢の書に達し、詩歌に志ふかし。ある時山路を行けるに、鹿の妻こふる声み山ふかく聞えければ、かくよみける。「さをしかの恋のかせきのなげきをも谷の柚木とこるよしもがな」。

402 釈 思文

下野国二荒山北嶺、仏巖谿と名づく其中に、鳳鳴閣の精舎ありて居住す。菅原連の判者にして山水連と号。門下挙てかぞへがたし。別号は竜華庵、歌三昧、芝蘭室、風雅金剛、玄々庵、三教子、大痴、洛山竜華道人、一釣翁等なり。多年狂歌を詠す。秀吟は世の人よく知る処な

り。ある年の冬都登りしつる時、宇治川のほとりを行けるに、瀬々の網代に魚のをどるをみてよみける歌、「身は浪の花よりもろき命ぞと網代の底に魚やわぶらし」。

403 台星子痴囊

伝詳ならず。或人曰、台星子は光嶺の僧なり。鳳鳴閣の社魁にして詠吟年あり。始め沖白帆と号し、中頃、慈童山子、白菊葉々成と改め、其后、芥子庵、須弥磨と称す。又改めて今の字に目つく。更に洛山樵爺、汲水翁、玄々庵等の別号あり。山水連の規矩、皆此人より出づ。今現に彼山に寓すとぞ。「雁の文帰るをみればむつごとの花なき閨に住はてよとや」。

404 亀 雄 (816)

荻原氏、本姓は源、名は成行、字は士立、通称謙輔。美濃国高須藩士。常に古今和歌集の風躰をしたひ、狂歌は三たびの飯にもかへてたし、近頃武隈連に入て執心殊にふかし。性風流を好みて、かたはら茶道に志し千利休の流をくめり。又皇国学に志厚し。しまの道を好むを以て癖とし、他に望むことなしといへり。翠毫子、簑の屋、碎塵亭、皆その別号なり。「うき秋に似るべくもなし春の来しけさも朝日は紅葉しつれど」。

405 敷嶋枝道 (701)

京都外神田の住。通称花谷善次郎、号を三余亭と呼。天性愚鈍浅学短才にして、日夜歌書に眼をさらすといへども服すといふことなし。されども狂歌に執心ふかく、芍薬亭翁の門に遊びて一日もこれを不廢。天保十年亥春判者に列す。梅樹園、竜吟子、和哥の屋、詞花陳人等の別号あり。「けふといへば目にこそみえね玉の春手にとるばかり何かうれしき」「霜がれの野べをしみればはかなさは露くさのみにかざりけり」。

406 椿園長住

下総国結城の人。姓は赤萩、名は文徽、字は世賢、俗称長左衛門。「ムシ」をしめ、晋子の流を汲て俳諧を好、本多公の門下に入りて秋岱と呼。后、古萩の屋翁に随ひて狂哥をたのしみ、文政のはじめ、花園の側に入りて披雲楼の号あり。常に劉伯倫、李太白のあとをしたひて、日夜酒中の仙洞に遊ぶ。「けふといへば箒をとらずちりはかずこはくの玉の春ぞむかふる」。

407 千卷堂天楽

陸奥仙台田尻荒街に居住す。文政年中より千秋側の判者ニ列す。通称中沢氏、清左衛門。其好む所、風月に詩を吟じ花鳥に歌を詠ず。香を書客に焚ては古興のあとを閲し、茶を画楼に喫しては常に山水を模写す。其他の伎芸ありといへども、たしむ所にあらず。「月をみてぬれしには似ずけさ春の日かげまばゆくかざす袂は」。

408 吉住琴雄 (507)

近江国信楽里なる花鳥屋ぬしは年久しき歌よみにて、たはれ歌よみいづる程の世の人、其名をしらざるはなし。あるとし秋のなかば、梅屋と桂花園のふたりのうしいへるは、萩が花今さかりにて、野末は春がすみ遠かた匂ふあしたにも見えまがひなんいざや、とそゝのかされて、うちつれ萩咲が山の野べにいにけり。げにやかすみたちむらさきだし春野の^ム心^チせ^ラる萩の花、さきみだれたるをちかたに、妻こふる雄鹿のあはれになくさへに、けしきそひてをかしうきこえにければ、琴雄はこしなる硯とり出て萩が枝の露うけとめ、墨すりながし筆を染つゝ、「萩が花鹿の音ながらあら野より庭にうつさばいかによからん」。かくなんよみいでけるを人々かんじあへりとかや。

409 静 居

陸奥仙台田尻住。姓氏不詳。**正**側千卷堂に随て狂歌を詠ず。号を硯

寿堂、又、泉石山人といふ。十有余年此道にあそびてあくことなし。友だちうちつどひて歌筵開し時、夏の恋といへる題を出して、静居によめといひければ、「たえ間なきおもひにたぐふものはなしもゆる螢もよるばかりにて」。かくよみけるとぞ。

410 山田稻城

上総国東金住。酒造を以て家職とす。通称山田八郎と呼ぶ。此里の長たり。癸歳より狂歌を詠じて秀作舎と号す。四方哥垣翁の門に遊んで判者の列に加はり、連号を山田連と呼。門下に遊ぶもの数多有。秀吟諸側の集冊にありて世の人しる所也。ある年の夏、雨うちつゞきふりける時よめる、「春雨は花もめぐむを五月雨はなにおもひ出に晴間まつらし」。

411 千 秋

江都両国川の東に世々居住す。名は孝常、号文恋園、菊の舎、一名文栄子。歳四十有一。いとけなきより文々舎の門にいりて狂歌をなし、三拾有余年の間秀逸数多し。天保八年冬末つかた判者の数に入りぬ。又和歌を好て詠吟す。其外囲碁、将棋、中将棋等の伎芸、妙手にいたらざる事なし。「あふまでを錦木立て待ばやな七日にとれし松にならひて」「うつろへる心の花ぞあぢきなきあれゆく里や志賀の故郷」。

412 蟹子磨

東都深川梁川町に住。文々舎蟹子磨翁の男子。父に順て総角の頃より狂歌を詠じ、文花楼清磨と呼び葛飾連の魁首たり。父翁亡後、連衆よりおして判者とし、父翁の号をつがしめて**文**側を再起す。年齢いまだ二十歳の上を多くいはず。「眉つくる野べの柳に佐保姫のよそほひそふる初がすみ哉」。

413 山道明平

東都堺町の辺り泉町に居住す。姓は源、氏は鈴木、通称平次郎と呼ぶ。狂歌は檜垣連に入て天保九年初夏より詠吟す。号を師より檜蔭亭とたまひ文殊連の一人たり。筆道は董斎先生に学びて梅園の号あり。常に酒を好て李白一斗詩百篇にならひ、酒に乗じて歌をよむくせあり。雪ありけるあした春のたちければ、「きえあへぬみ雪のうへにたち初てきのふを去年とかすむ春哉」。かくよみけるとなん。此道に入たちてよりいまだいくばくもあらぬを、かゝる歌よみいつるは上手の口つきになん有ける。いとく末たのもしき若ものなりと、人々いひあへりとぞ。

414 寺井明代 (817・820)

いつの頃にかありけん檜井居、心あひの友だちふたりみたりと伊勢の内外の宮に年籠せばやと旅立にけり。頃は冬の末にしあれば、行年の野山など見処もなく冬がれぬれば、たゞはしりにはしりておほん神に年籠なしける。はやたちかへる春のあした、四方の空みどりにかすみわたり、さきの行年にみつゝ過にし野山なごさうくしかりしにはひきかへて、をかしう見もせぬ所の心ちせられぬ。ある榎立山の空のけしきうるはしうかすめるを打ながめて、「あふぎみればその立としもまがひけり榎たつ山の春の初空」。かくなんよみけると旅の袖日記にはしるしつたりとぞ。

415 満盛 (818)

東都深川住。今日本橋の辺りに住居す。氏は松田、名は政儀。狂歌を好んで詠ず。故鈍々亭の社中にて別号百花園、又、金鈴子といふ。「恋しらぬ身にも嬉しな声きけば心春めくけさうぶみ売」。

416 兎雪

摂津国御影の里に住する商家也。氏は檀、名は清續、別号玉塵舎。天

保七年より~~東~~側ニ入狂歌を詠。若年にして秀吟多し。「八千ぐさの枯ふす野らも霜おけば朝な夕なに花さきにけり」。

417 手束盧橘

阿波国柿原里、緑薫園は徳嶋子鶯連の一人にして、東都~~西~~側の歌よみなり。秀吟は檜垣連月並の集冊に多くありて、人のよくしりたる所なり。或年秋のなかば、用の事ありて供人ひとり具して大和国に行けり。事はてゝ吉野竜田の紅葉、ふるき名所をたづねて見るきけるゆふべ、霧ふかく立おほひて今までみえたる立田山のみみち葉、川の面に錦うちのおへたらんやうなる影も跡なくなりゆきて、さびしさいはんかたなし。「立おほふ霧の海には蜚がかる見るめもなくてさびしかりけり」。かく口ずさみて心なぐさめけると、供の奴の後にかたり伝へけるとか。

418 富田明居 (102・303・819)

軒端の梅庭の桜水枝さしそひ、若葉しげりていと窓をぐらく、日頃このめる学の道もおこたりがちなるを、さつきの雨、をやみなうふりつゞき雲ちかうたちおほひてまのうへおもく、笠かづけるがうへにむしのたれ衣そへたらんやうにおもはれる。春の雨うちつゞきふりけるとはことやうにありければ、檜集園ぬし庭うちながめて、「はれて後夏だに花のひらきなば五月の雨もうれしからまし」。かくよみいで、心なぐさめけるとなん。

【五編】

501 霰音高

万里小路氏、姓は藤原、名は音高。代々吾妻の竹園に仕へて東台北麓根岸の里に住す。近ごろ至清堂の吹挙により菅原垣山桜連の判者をゆるされ、榎の屋、北栄子、雪川子等の号あり。生得人の和をもとむといへどもまけじだましひやまず、まがれるをにくむのへきあり。雑芸

たのしむ事あるをも捨て、ひたすら此道におもむく。音高常にいへらく、狂歌道に遊ぶ事、月日多くもあらざれば高点の哥少し。しかはあれども塵ひぢりなれる山の雨雲、露ひのぼる本文あり。猶此道をつゝのぼり月日のぼりなば、などか富士筑波をもひきく見おろすべき高点の哥なからんやは、といへり。されば此道に心をいゝことしるべし。「かぐはしく名はかをりけり東大寺ひめおく伽羅や匂ひそふらん」。

502 友 雄

尾張国名古屋伝馬町に住す。通称大久保治兵衛と呼。好んで狂歌を詠じ水魚園と号す。今風流の旅宿を業とす。近国近在の雅士常に此庵につどひ、遠境の雅客此地をよぎる者、聞つたへてかならず此家に宿る。されば遠近諸国の雅談珍説を聞て楽しみとす。「川水のおもて白くもながれけり氷るばかりに寒き月かげ」。

503 月 明 一

鳥山氏、本姓新田、通称専助、名は直行。武蔵国赤山石神の郷に住し累代村長を勤むといへども、質朴廉直にして秋毫も犯す事なく、一村の民を愛して私慾なければ、代々清貧にして家に余財なし。生つき愚鈍にして諸芸拙く、道にいたることかたし。号は檜峰館。庭前に数百年を経し楠の一樹あり。依て師より樟の門の号をゆるさる。又、楠庵南木と呼。蕉風の俳諧、遠州流の插花の道に遊ぶといへども、素より好む所にあらず。只近隣の人々のすゝめにまかせ、まじはり親しむのみなり。狂歌は天保四年の夏檜垣に門入し、同九戌の春檜垣側の判者に列居す。「青柳の髪あらふときねりいればいかによからん梅の下風」。

504 瑞 々

越前国敦賀に住す。はじめ浪速の故月夜庵三津人の門に俳諧を学び、竹室雪真人といひ、三津人みまかりて後、東都檜園の詠客となり毎に

玉珠園瑞々と云。年今初老に及ぶ。俳諧の秀逸、狂歌の名吟多し。「枯あしに音なふ池の玉あられまぶしの魚やおどろかすらん」。

505 千船友風 (602)

阿波国徳島在麻植の住人。通称鹿嶋屋^{ムシ}兵衛と呼び好て狂歌を詠じ、徳嶋鶯子連の一人にして東都檜垣連の詠人なり。常に和漢の書を読^くぼ^どに、本居宣長大人の跡をしたひ皇国学に眼をさらし、たま^く心うむ時はたはれ歌をよみて心を養ふとぞ。ある年秋のはじめ、友だちの庵にて歌むしろまうけしとき、友風に秋の恋といふことをよめといひければ、筆とりあへず、「うつ蟬の身はぬけがらとなりやせん人の心の秋にあふ身は」。かく即吟によりければ人みな感じけるとぞ。

506 永 良

陸奥福島島の住人。通称宗輔と呼び、さる家につかへて支配の職たり。狂歌をこのんで詠事年あり。号を呉綿堂とよび東都檜垣連の一人たり。近頃師より門の字号たまはりて、寿の門の別号あり。ある時人々と、もに歌よめる中に、冬の恋といふ事を、「さだめなき人の心もしのばれてよそのしぐれにぬらす袖哉」。

507 琴 雄 (408)

花鳥屋は淡海国信楽里の人たり。京に程遠からねば折として都に出て歌よみ、人々とふかくむつみあへり。ある日歌むしろはて、玉兔園、花の門、白菊亭、三蔵楼など、ともに、打まれて加茂の御やしるに詣でんとて出られけるに、けふは西の日とてまうづる人ことに多かりければ、琴雄とりあへず、「水鳥の加茂の社はねぎごとにひまなくあしをはこぶ諸人」。かくよみてふところ昏にかいつけて、御前に手向たてまつりけるを人々感じあへりとぞ。

508 綾 成

秋郊亭は和泉国堺の人にして皇国まなびに深く心をこめ、歌よむことをえたる人なり。あるとしのはじめ空うらゝにのどかなりければ、心なにとなくをかしう庭下駄はきつゝ、折戸うちひらきてそゞろに住よしのかたへありきて、遠里小野のほとりまで来にける。目もはるに野べうちながめられけるに、去年の雪ところゝにむら消たる中より、をりしりがほに若菜生ひ出たるをみて、古今集、春日野の飛火の野守いでゝ見よ、のうた思ひ出つゝ、「今いくかありてと折しおよびもてつむべくなりぬ野べの若菜は」。かく口ずさびてかへりけるとか。

509 伊藤千条 (101)

陸奥国仙台二日街住、千菊園は、たはれ歌よめるきはみ名をしらざる人なき当世の英雄になんありける。こぞの秋、千柳亭、千古亭など、花野見ありきけるが、萩尾花さかりに咲みだれうるはしき色どりも何となう心さうゝしく、露おきそはる夕はむしの音に哀いやまし、家路いそぎてかへりける野べに、ことし春のはじめ、朝とみに用の事ありて来にけるに見し秋の千くさの花は跡かたもなう、只わか草の雪間にもえ出たる中に所々に若菜まじれるばかり。見ん眺もなきに、里の少女のかたまとりもち、つみをるすがたなめかしうふりの袂の朝露にひぢたるは、秋の夕露に袖ぬらしゝとはことかはりてをかしかりければ、「うき秋のこくびならめや浅沢に若なつみつゝぬらす袂は」。かく口ずさびて此野べを過けるとなん。

510 捨 魚 (301)

至清堂はいまだ総角なりし頃よりいみじき達吟にて、十首二十首の歌はまたゝくひまによりみ出ながら、をかしきふしありてなべての人の歌におなじからず。さればそのをしへ子たちも師の速詠をうらやみて歌数多くよむ事あれば、かならずいましめり。いへらく、およそ歌をよまんとならばまづ一首のおもぶきをもとめて、しかしてその詞をあや

なし、てにをはをとゝのへ調たかなたらんとをむねとすべし。むさぼりて多くよむものはよき歌なきはもとよりにて、上達する時さになしといへり。されば此の人の達吟は生れ得たる業にて、人のまねぶべき事にあらず。以上初編の伝にもれたるをこゝにいふ。いかなる暇ある時にかありけん、をしへ子のたれかれ四五人りともなひて、大和路に出たち名所みありきける時、薬師寺なる仏足形の石をみて、「雪の山したふ御寺に御仏のあしの跡ある石はすゑけむ」となんよみければ、人々めでくつがへりけるとぞ。また広く和漢の書にわたりて、世の先生といはるゝ儒者も及びがたきさえありながら、おのがきたなき心をおしかくして、うはべのみいかめしくする事をにくむ。さる故に色をこのむとにはあらねど、ふかく物のあはれをしれる人にて情ふかし。さればかく旅にありながら故郷に契かはしゝ女の事わすれがたくやありけん、道のべの薄をみて、「我こゝろ尾花がもとの草なりと風のつてにもしらせましかば」。かくそゞろに口ずさびければ、ともなへる人々ことわりなりとぞいひあへりける。

511 船 盛

法梅園は至清堂のをしへ子にてすこぶる口才あり。言語応対水の流るゝがごとし。またたはれ歌に心ざしふかく、つねに友をつどへて歌よむ事をたのしみとす。そが中によからぬ歌などあれば、おのれ引なほしもした師に点を乞もして、友だちをしへ子を取たつる事をつとめとせり。ある時、古寺といふ題を出して人々とよみける歌、「松多くたてるをのへの山寺はうべこそ鶴のはやしなりけれ」と口ずさびければ、まのあたりのけしきをみて遠く仏滅の昔をさへ思ひよせられたる。なべてならずと人みな感じけりとかや。

512 唐 居

下総国関宿の藩士。一号紅葉庵、又、手枕庵、哥種の別号あり。文政の末より蓬萊居に随ひて、繁務の暇ある時は戯歌を詠じ俳諧の発句を

も吐といへども、更にかたよる事なきは中庸の徳を学ぶなるべし。近頃檜集園のうし、東の都より移りすまるゝまゝに、このうしのをしへをもうけて、もはら皇国書のふるきをたづねてあたらしき趣向を知る事をえたりとなん。「老けぬる君が為とや生ぬらん若菜も雪の寒さいとはで」。

513 文 世

氏は川輪、名は佐保。下総国関宿の藩士にして在府なり。近頃蓬萊居の門に入て専らをしへをうく。号を好梅園といふ。他にこのむことなくして、終日皇国のふみを学びて更にうむことなしとぞ。「哀わが袖こそぬるれ野べの虫茂き草葉の露わくる音に」。

514 為 明

檜珍亭は伝にいへるがごとく道とくありく業ありけり。されば風寒く氷とづる冬の日も地さけん暑き夏もいとはず、旅することを好ける。あるとし水無月なかば、相模国雨ふり山にまうでんと昼のあつきさかりにたちいでられけるが、夜はなほ風すゞしく望の月影あかくたよりよしとあへぎゝいそぎければ、相模川のほとりにつきにける。ことは常より照りつよく、川水もすがれてかちわたりせまほしき浅瀬にみえけれど、此川に舟うかべてこなたよりかなたへわたすかせぎの掟ありければ、むかひの岸辺なる渡りの舟よばひて待けるが、みじか夜の月川の面にうつるを見て、「夏瘦の野川の水に影とめて空にながれの早き月かな」。かくよめるうちに、舟こなたへつきければうちのりけるとぞ。

【六編】

601 茂木広善 (702)

下総の国野田の里の辺りは桃林多くありて、春弥生の花ざかりには天つ空も酔たることく、茜さす夕づく日の匂ひにもおとるまじう見ゆる

頃は、をちこちの人々割籠小筒など取もたせて、かなたこなたへむしろとりひろげて舞つうたひつ興に入て、日のくるゝもしらずあそぶ人多かりける。此日、柏喰社ぬしもおなじむしろにありけるが、夜に入て桃の梢に月影さし出ておぼろげに匂ふを見て、盃とりあげつゝ酌とりの酒つぎをはらぬうちに、「またさらにおぼろ月夜もめづらしな影さやけきは常のことにて」とよみければ、一座の人手をあげて感じける。又さつきのはじめ、用の事ありて草ふかき野路をたどり行けるに、八重むぐらしげれる中にうるはしく花さきいでゝ百合のたてるをみて、「あはれなり秋の千草にさきだちて夏野にひとり咲しさゆりは」。かくよみけると聞えたり。

602 友 風 (505)

阿波の国麻植の里、春秋亭は今の世のみやびをたり。春は花夏は涼秋は月を愛冬は雪を眺よろこび、野山などのけしきを見て歌よみ詩をつくり、心をやしなはれる人なり。さるをいつの事にかありけん、春の雨ふりいでゝをやみなく日数ふりつゞきければ、ひたごりにこもりぬのうきまゝに、さまゝの遊びなんなして心なぐさめけるが、猶雨は日毎ふりければ今はあそびごとを尽して、ひとり肱枕さびしく空うらめしうながめて、かくよみいでけるとぞ。「何をしてけふはくらさんきのふにて遊びはつきぬ春雨の宿」。

603 実 成

陸奥盛岡の住にして氏は平野、通称治三郎と呼。世々味噌醤油をつくりて遠境まで配り鬻ぐを業とす。雪の屋森蔭うしに随ひて狂歌を学び、執事連長たり。わか人の中の秀哥は多く此人にありとぞ。時に年甫十九歳。「はなむしろしかんまうけの庭の面をよきほどぬらす庵の春雨」。

604 光 房

陸奥二本松、光房ぬしは年二十歳の上を多く出ざる若人也。心みやび

にして世のつとめのひまあるときは、たゞ歌よみ書を学ぶの外なし。庭前に梅樹多くあるによりて梅園の号あり。あるとし春弥生、雨ふりつゞきはれ間なく野山の桜みん日もなかりける。心なぐさに桜の画かきをはりて、「うつし絵の花にあそびてこもるかな空はれまなきはる雨のやど」。かくよみけるとぞ。

605 貞 青

河内の国黒ちの里なる深山堂ぬしは、年久しき哥よみにてなんありける。いつの年にかありけん春弥生のなかば、心あひの友花月庵大道ぬしともるともに、こゝかしこの野山の花見ありかれけるに、春の日の長きもあかず日は西山にはやいりて猶興じ眺ありけるが、春の山風桜の梢ふきわたり花のちりしくに、月の影おぼろにかすみたしかに見えねば空打みやりて、「ちるうさを見じと霞にへだゝりて花にや月のなれぬなるらん」とよみて、大道ぬしに見せけると後に聞えけるとぞ。

606 琵琶彦 (401)

尾張国名古屋古渡の里にすめる滝屋ぬしはなりはひのかせぎにと、幾国々をなん廻りありかれける。あるとし古渡を立出て三河路を心ざしいそがれける。頃は秋の末にして、四方山の樹々うるはしう紅葉そみつるけしきうちながめつゝありきければ、夕日も西山の端に落入て足もとをぐらかりけれど、もとより旅路なれてゐにければうしとせず、山路をあへぎゝいそがれけるに、最中の月さし出て道のたよりよく遠方までも見えわたりけるに、紅葉のかげに雄鹿のふしゐたるを見て、「おく山の紅葉のかげにふす鹿のはるの心にかでなりけむ」とよみける。かゝる難儀の旅路にて歌よむこと、たゞ人のおよぶ業ならんや。

607 胤 雄

江戸馬喰町初音馬場の官舎に住す。氏は中沢、通称平之丞、名帥、字

『諸家小伝録』に見えたる人々

壮夫。幼時文武を嗜の折、数学に心を寄す。頗発達の聞えあり。弱冠にして公務にあづかり、陸奥なる塙および浅川の両陣屋に住す。その頃より狂哥を詠じ葛飾連に入て文量舎藏主と呼。故ありて燕栗園を慕ひ、翁より判者をゆるされ文喰社胤雄とあらたむ。其後江戸に帰りてよりはいさゝかおこたりの心出て、喫茶俳諧をのみ弄しかど、近ごろふたゝび水魚喚友の間に遊びて交り深し。また清水光房に随ひて和歌を詠じ、いとまある時は芳宜園の遺跡をならふときけり。会友館、萍屋の別号あり。このごろやむごとなき君より額をたまひて、さらに雑体歌垣の号あり。性質名譽ををこのまず出詠一組を限りとすれば、甲乙録において誉あることすくなけれど、世にしるところにはまされり。年いまだ厄をこえず。あるときいとふかく契りたる中をへだてらるゝことありて、逢見る事もえならずなりける折から、池なる水鳥を見てよみける。「銀羽を身にもつをしは諸ともにしなんとまでや恋にせまれる」。この女は玉楼の遊女にて、誰袖と申となんあるひとかたり伝ふ。

608 守 鷹

出羽国天童の藩士にして姓は藤原、氏は吉田、文哥堂真名富の弟なり。幼時より俳諧の発句を吟出し、また深く和歌および俳諧歌を好みて秀詠多し。松旭亭と号す。また梅月庵玉潤亭ともいふ。庭上に愛石ありて万寿石と呼ぶ。よりて亀の門の別号あり。時に年甫三十有四歳也とぞ。いとまある時は万寿石に乗りて、遣り水に釣をたれたのしむ。ある時友人来り訪ふ。守鷹例の亀石の上に座し釣を垂て余念なし。友人たはぶれに云、子のすがた浦島が子に似たり。いかなる筈をかもてるととふ。折ふし日すでにかたぶきて、夕月のかげいと臆にかすみながら出ければ、守鷹とりあへず、「秋の夜は紅葉とともにてらんとて花には霞む月のかげかも」と口ずさびて、是なんわがもてる箱なると答ふ。俗に其人の得意とする事をおはこといふ故也。友人聞て、げにかくめでたき春の夜の月も、あけなばいかばかりかくやしからましと、ともに手を打てわらひあへ

りとなん。

609 桂 影芳 (822)

武蔵国入間郡みよしの、里に住して、新井武啓と号す。無古都雄たり。江戸辰巳富岡のほとりの仮宅に居住して、通称上総屋新兵衛と呼ぶ。狂哥は千種庵二世千首楼を師とす。師より春曙斎、霞桜亭また一樹園の号を給ひて、哥よとむいへどもいたらず、いたれるに道を行ず。これいかにせん。からやまとのふみはさらなり、みやびつどひのけぢめありてふ事をさへ学えしらざるをや。しかはいへど物いたりてつとめざらんより、おこたらざらんをよしとさだめ、今_中連に遊ぶ。ある日春雨のいとつれ々なるに、かくなんよめる。「花鳥のいろ音ふくめる春雨はさてあるべきをふるにうみけり」。また夏の夜の月を見て、「明やすき夏のゆふべの月影を秋の夜にして見んよしもがな」。秋の夜の月にさへ五百夜つがなんとかいへれば、みじか夜の月のをしさはげにさもありなんとたれもくことわり、さりとぞおもひけるとなむ。

【七編】

701 枝 道 (405)

東都下谷広小路边に住する三余亭ぬしは、人のよくしりたる当世たはれ哥の上手になん有ける。ある年夏のはじめつかた、京のぼりして宇治川のほとりを供人打つれこ、かしこ見ありかれけるに、鶺鴒つかふ舟の山吹の瀬にみえければ、腰なる旅硯とり出て「宇治川や山吹の瀬に魚えてもみにならずとて鶺鴒やかこつらん」。かく日記にかいつつ、都のしるべのかたへいにけり。かくて都の名どころも残るかたなく見尽して、また大和の国にいきて名だかき処々見めぐり、日数あまた経にければ冬のなかばになりけり。雪ふりける日、片岡野べを打過けるに里のわらはども、うちつどひつ、手あかうして達磨禪師の形を余念なう作り居けるを見てかくなん。「雪達磨かた岡野べにつくりて飯にうゝるもしらぬあげまき」。此所のふるごとをおもひよそへて口ず

さびつゝ過けるとかや。

702 茂木広善 (601)

下総野田の里、星清子ぬしは此さとならびなき富家にしあれば、前栽の広さめもはるにいと高き築山ありて、利根川の流れ引つゝ滝おとし水はしらし、四季をりくくの草に木にさまゝ花かへてをかしき中にも、秋はいろくくの草の花ども咲出うるはしうみえたるに、をりふし秋の最中の空はれわたりけるとて、数寄屋の縁に敷ものとりひろげさせ端ゐして庭の面をうち眺めけるに、月影の千種の露ごとにうつりたるは、玉敷の庭もかくやらんとおもふまでにみえければ、かたへの硯引よせ筆とりもあへず、「月のかげうつればをかししら露はひろひあぐべき玉ならねども」。かくよみけりとなん。

703 喜 吉 (109・306)

武蔵小川の里の沢泉舎ぬし、陸奥松嶋遊覧せばと心あひの友だちとうちつれ、春きさらぎの空まだ寒きに旅だちけり。道すがら歌人の名に聞えたる人_ンどのいほりを尋られければ、弥生はじめの頃磐手山の磐磐手の里に来にけり。こゝは山吹の名だゝる所にて、時しりがほに花咲みだれたるをみて喜吉ぬし、「あはれさのつてあるべきをとろさへいはての里の山ぶきのはな」。かくよみけるを友だち感じあへりけり。さて夏のはじめに陸奥残る処なう見ありきて帰られけるに、夏も過秋もやゝ九月の節供ちかくなりければ、庭の面の千ぐさの花ながめなうさうくしくみえける中に、只菊の花苔まじりに咲たるは一しほをかしかりければ、はしちかなる硯引よせさらくくと、「菊の花まだしきほどを我めでんうつろふからに色まさるとも」。かくかきをはりおしもみて捨られけるを、かたへなるわらはの拾ひ置けるとぞ。

704 真 名 富 (111)

出羽国最上川の辺り天童の里に世々する吉田ぬしは、総角の頃より

大江戸のみに勤仕てありけるいとまに、四方歌垣翁の庵へかよひて俳諧哥よまれるに、四十ばかりの頃故郷なる天童へ帰られける。ふるさとはいとまありがちなりければ近きわたりの若人がりゆきて、歌の道のをかきふりをすゝめ、ものせられけるまめくしき心より、おのもくしたひ来てあが仏と尊み、日々により人いやましければ、久しうはれなる歌筵にいだすことおこたりるにければとて、をしへ子たちをそゝのかして、檜園は知己なればとて此月並のつどへをはじめとして、外の大人たちのつどへにもたれかれと共にのみ出しけるは、此三とせ四とせこなたの事になんありける。さればをしへ子たち角力立の類出さんをりは、これにやせましかれにやせましと此うしに問ひものする人おほし。さればかたへの人いらへく、君としたけてかゝる事をもうるさしとはおもひたまはずやととひければ、やがて「捨られぬ世のうれしさにひろひたる老が年をば何なげくべき」。かくよみて筆うちをさしおきければ、すき人なりとほめのしりて帰りけり。此うしの庭の入門のかたへに、年ふる松の鶴の羽をのしたらん形あるを愛て、あしたゆふべとなく木陰によりて眺めもしむしろ敷せて歌よみければ、をしへ子たち鶴の門ぬしとぞ呼けるとなん。

705 玉江真舟

津の国真住吉なる神詠堂のあるじは、初め視船といふ。浪速に居をもとめてより、号を碧玉園また蘆屋とあらたむ。その文に、みやびやかなる人のふかきこゝろばしもえこそしらね、難波の春のけしき年ごろこれがなつかしさに、みやこには住わびはてと、壬生忠見はめで給へりしすみよしの里のやどりを、いつしか立いでゝこゝに庵しめたる。さればわが書斎を萱の屋としもことさらにおほせつるは、此なにはをおきてまたいづれにかやどりをとめんのこゝろしらひにて、はたいたりあさき身にして江の水のながれたまましかりせば、芦のわか葉のひとふしをもうたひいでなましと、みづからかうしもなづくるになん。「わが庭にあす咲ぬべき花をしもまてば遠きにゆくおも

ひかな」。

706 紀 真和

氏は森居、名は孝照、尾張国名古屋広井に住す。美都垣と号し又、蕉園、柏園ともいふ。文政成のとし四方歌垣翁より判者をゆるされ、秀詠多く諸側のすりまきにみえたり。名古屋四境に四才を立、西に住する故、城西歌垣と称して門人多し。ある時鵜飼といへる題にて、「世のあはれしらぬ鵜飼のなりはひや月あかき夜は袖のかわきて」。かくものをうらうへにとりて、たくみによみなす事をよくせり。さればすべてよみ出る歌皆おもぶき深く興ありて、かいなでの歌よみのおよぶべき所にあらず。

707 鶯 光世

東都新宿に住す。姓は源、氏は竹内、通称を宗七と呼。曾て六樹園翁に順て狂歌を詠じ花月亭二楽と号す。師翁没後しばらく休詠して有けるに翁の連内、擣衣園音成ぬしのすゝめに依てふたゝび詠吟す。今何れの側といふ事なく独立して諸側へ出詠す。竹内氏なるに依て、天保九戌年より竹裏庵光世と改名す。また鶯邨居の別号あり。姓酒を好みて斗酒を傾け尚あくことをしらざりしが、思ひたつよしありて固く禁じ今一滴も飲ず。只狂歌をよむ事を又なきたのしみとせり。かつ天明寛政のふりをきらひて当世の風調をうべなひ、優言の詠歌すくなからず。「わが中にいかでならはんしる人もなみの下なるにほのかよひ路」。

708 徳 賀

東都日本橋の辺り道寿やしきに住す。年齢廿とせあまり八歳。氏は平野、通称を忠八と呼ぶ。天保七申年よりはじめて琴通舎翁を師としてたはれ歌を詠ず。号を琴詠舎とよべり。また琴鼓堂、山甚園等の別号あり。「すさまじきこがねの山をくづすべき力ありとは見えぬうか

れ女」。

709 泉 清 浄

南総養老高根の住。農家にして氏は永野、通称を栄助と呼ぶ。常に艸木を養ひて樂とす。天保酉年より深川桂居翁の門に入て俳諧うたを詠ず。養老連の一人たり。遷月堂と号す。「川の瀬の浅きはしりて後の世の罪のふかきはしらぬうかひ雄」。

710 太山茂樹 (821)

東都本材木町に住。通称中村勘右衛門といふ。天保五年六月より月下亭の門に入て初て俳諧歌を詠じ号を材月園と呼。されども元より家貧しければ、今年二十五になれども一ひらの書をみしこともなく、文一日も手習せし事もあらねば、我詠る歌を物に書つくる事もならず。しかのみならず性質愚鈍なれば、此道に入てより六とせになれども人に聞せまほしと思ふ歌は未一つと詠得ず。「うさのみはとはずなりけり常うとき人さへ庭の花につどふを」。

711 光 郷

武蔵川越の城頭嶋街に居住す。薬種を交易するを家業とす。秋錦亭、又、泰庵と号す。狂歌を詠初てよりいまだいくばくもあらざれども、秀詠達吟にして此道に年久しく遊ぶ者といへども及ぶ事能はずとぞ。「春く^{はる}れば老鶯もわかやぎぬいかでわが身もよじらましかば」。

【八編】

801 芦原田鶴

東都鉄炮洲に居住す。氏は菊地、通称仁左衛門と呼。故鈍々亭の門に入て狂歌を詠じ、千齡子、湊淵亭の号あり。「見るうちにはれみくもりみとく過ぬ月やあゆめる雲やはしれる」。

802 朝日輝高

上野国山名の庄家、伊藤氏の嫡男。雅号を山一亭輝高といへり。山本連の礎なり。幼年より為流庵に睦びて兄弟の契をなす。狂哥は折々心の慰により。又近駅に出て遊婦を愛し志深き人也。されば同駅に三人の馴婦あり。慕心防ぎがたく思はれる時、彼等がもとへ「めしもの杓子面なる女にも財布の腹のへるがあやしき」。かくよみて送られるを見て、三人の女腹にたまり兼ねるにや、それまでやしなひえたる栗飯のかごをその儘かへしけりとなん。これ皆哥の徳なり。なほ此外にも恋歌に秀吟多し。ある時、不逢祈恋といふ事を、「つまなしの花を座とするみ仏をいのりし故かあふことのなき」。かくよみければ人々手を打て感じけるとぞ。

803 窓 雪

中山道熊谷の駅に住居す。好て狂哥をよめり。友人宝彫亭形義ぬしとある日、歌の筵にありて夏山といへる題をよめる。「しら浪とみえにし花の梢さへ和田の藍なすみよし野の山」。かくよみければ形義ぬし感じ思はれけるとかや。

804 滝 守

上総国養老上高根に居住して、世々長の家たり。氏は永野、通称熊吉と呼。狂歌は月下亭ぬしに順て詠吟す。号を孝月亭といふ。此人詠始しより、養老に歌人多く出来たりとぞ。ある時友だちの庵にて歌筵を開きし時、祈恋といへるをよめとありければ、声に応じて筆をとりあげかくよみける。「さりともしつれなき人にゆふだすきむすびかへつゝなほいのるかな」。

805 秋田広海

姓は源、氏は増岡、名は保敦。武蔵谷貫に住す。武隈庵の門に入て戯歌を詠じ、初名橘下窓と号し、伝は剪綵百人一首に詳なり。今、民年

庵、郡杼理園、四方の屋の別号あり。暇ある時は古事記伝、万葉集に目をさらすといへども、不才にして心にいらす。物毎難解事は交厚千束庵に文通し、今此小伝の集に入るは、寔に盲亀の浮木を得たるごとしと云り。「難波がたたかぬ汀のかれ芦も日かげにけふる霜の朝あけ」「こもらずばいかでみるべき小初瀬や枯木に花の霜のあけぼの」。

806 津田詮村

上野國小幡侯の臣にして、今東都西丸下に住居す。文政の中頃より二世浅草庵守舎翁の門に入て狂歌を詠じ、壺嘯樓の号を受、琴繁といひき。翁没して三世のあるじ春村うしに随ひて哥学に心を耽らし、記紀を初として史類物語等をよみ、ことに詞の玉の緒、詞の八衢二書を明らめてよみ出る歌、格にたがへるはなし。天保十年冬浅舒庵の号を受、詮村と改。春鶯園の別号あり。「かへるでもみちばかりはよしの川岩もとさりて浪にちりゆく」。

807 明 信

東都芝三嶋町に住す。姓は源、氏は海野、通称を弥助といふ。家職いとまある時は狂歌を詠じ又俳諧の発句を吐くといへども、狂歌のかしみにしかざるをしりて歌を詠吟する事多し。狂名を花筵亭砂美彦と呼けるを、天保七年秋檜垣連に入て檜盛園明信と改めたり。俳諧は雪中庵対山に順て芦雪といふとぞ。あるとしの冬、朝まだき起出て庭うちながめつゝ、「風さゆるあしたの庭におく霜はさくしら菊にまがふ間ぞなき」。かくよみてふところ紙にかいつけけると聞えたり。

808 土川明宗

飛驒国高山に住す。名は軌方、字君慎、通称角屋宗左衛門。いさゝかなる雀粮の田甫タモによりて、口にのりするの外嗜なし。父も狂歌を好、文化のころほひ四方滝水米人のうし此地遊歴のをりから、舟津てふ里にて哥をこひけるに、取あへず、大浪の如くつらなる山こえて飛驒の

舟津にかゝる旅人、とよみてあたへられたる。当意即妙なるを感吟のあまり、隨身して跡利館朱人と呼。文政戊子六月病にふして、やうく死になんくとするの月、花瓶にさせる蓮をみてよめる。死てから蓮のうてなも何か出んとかくいけるを花とこそ見め。かく一生を狂言綺語の間にあそびて終りける。則、其子にしておなじくこの道を好むこと大かたならず。東都竜の門の門にいりて師より竜喰社の号を賜はり、斎竜連の末筵に座す。また八月望の夜に生るゝによりて満生子の号あり。古き発句に、名月やこよひ生るゝ子もあらん、とあるには似るべくもあらず。何ひとつあかせることもなくて、いたづらにあふるゝまで肥ふとりたるのみは、泥亀にもをさくをとるまじ。たまゝ師の高点を得て、手のまひ足の踏どころをしらずなん有ける。「こよひかく我をまたせてこゝろみにつきそひをるか君が面影」。

809 鏡 磨 安

北越新発田の辺、猿橋の商家にして、通称鏡屋安右衛門、名は章広、字は鳳義、氏桐生と言を以て桐樹園と号す。年甫三十三。故六樹園翁の門に入て狂歌を詠ず。且つ蹴鞠、囲碁を嗜、書を讀の僻あり。今、延寿連に加入す。「手にふれなば消ん朝霜もみち葉のたなひらにしも見るはをかしな」。

810 真 砂

北越新発田猿橋の商家たり。通称川口屋喜八と呼。いとまある時は和漢の書をよみ狂歌を詠ず。近来延寿連に入て、千代の門ぬしに順て東都檜垣連に加はり手柄多し。川口屋と呼ぶによりて澄川亭、又、岸廻カサマヅメ門の号あり。年甫三十一才。ある冬の朝、起いで、窓のさうじおしひらきみければ、霜のふりけるを見て、「明ぬるを月夜とみせて朝いづる人まどはせにおける霜かも」。

811 釈 照信

琵琶湖西の産。幼なうして台嶺に登り、顕密の学を鍊磨す。故に日吉の屋の号あり。今伊勢の津、寒松精舎に遊び、専ら書を講じて院中の童蒙を導けり。はた今年天保亥の夏、旱天に雨を禱りて驗ありとぞ。傍に狂歌をよくして、中側浜荻連の魁首たり。荻屋常にいへらく、我たまゝ歌を以て世にしらるといへども、天性短才にして何ぞ師たるの器ならん。只つとめて我にまさらん事をはげみ給へと。照信また其器ありて、諸方へ出詠するが如きはめで、師の添削をまつことなし。されど頗る風調たりきは其門によるが故ならんか。「まちてこのあくるにながき来ぬ夜は逢みん時にかへなましかば」。

812 手引糸屑

下野国佐野新吉水の住。綿糸を業とす。故に六維園、紡采子の号あり。五翁晩年の社中にして性至て愚鈍なり。文書他芸智なければ学ばず、まなばざれば不知、一ツとしてえたる事なし。狂歌の拙き事は、梓にのらず番附の低下を以て人知給ふ所也。「きぬゝは命をあふにかへずしてかへるつらさぞ死ぬばかりなる」。

813 千代松成

下総国千潟万力に住して世々農家たり。氏は米木政則、通称を権右衛門と呼。狂歌は天保のはじめの頃、東都檜園の門に入て詠ず。檜雑園、又、千歳庵の号有。又算術を好て妙算をえたり。其余囲碁、将棋に遊び、分限に随て仁の道を志すとかや。時に年齢三十五歳なり。「心あてにあすもまたみん月のいる山の端近くゆかずもあらなん」。

814 齡 長樹 (103)

和一園ぬしは和泉国堺の津の人なり。此人哥に堪能なる事は、諸側の摺巻に出たる秀歌を見てしるべし。或時空はれわたりたる夜、月の遠山にいるをたしみて、「世の秋をいとふともなき月影のいかでか山に

いらんとはする」。かくよみけるを此つらの友垣かんじあへりとぞ。

815 真鷹

松旭亭は出羽の国天童の藩士也。一とせむつきのはじめ、なにがしといへる行脚のうた人、真鷹がりといひ来てなにくれと物かたらひける時、かの歌人のいひけるは、わが故さとは春に先だちて梅なッどいとうるはしく咲侍り。このみくには寒さつよくて梅はつぼみさへ見侍らず。いとくちをしなどほこりにいひければ、真鷹とりあへず、「我郷は梅もさけれど松をのみ春のはじめのものとみるかな」。かくなんよめりければかのうた人、口を閉てかへりぬとぞ。宗任がなにとかやいひけんにもまされりと、かの国人の物がたりき。

816 亀 雄 (404)

美濃国高須の人、緑毛園といふはいみじく口とき歌よみなりけり。あるとき友どちつとひて、一日百首の恋の哥よみけることありしに、亀雄は辰のころよりはじめて午の貝ふく頃ははやよみはてにき。それが中に祈恋を、「祈りても神なし月かうきやわが袖はなみだのしぐれのみしつ」、契恋を、「錦木はいざ取いれて契らまし立しうき名はよくちずとも」。これらはかたへ書せし人のおぼえてかたりたるなり。

817 明 代 (414・820)

檜井居は今、檜園庵中執事たり。ある時、用の事ありて田舎わたらひせしころ、しばし山里にやどりもとめてありしに、その川辺に紅葉のちりかゝるをみて、「かげうつる枝の紅葉も山川の岩こす浪にせかれてやちる」。さて春にもなりければ、「跡とめぬ笥の水もはる立てけさは若きにかへるをぞくむ」。これらの歌は旅の日記よりさぐりいでたる也けり。

818 満盛 (415)

百花園ぬしは江戸日本橋の人也。一とせ大和めぐりといふ事なしける時、泊瀬の大ひさに額たてまつらんとてすゝめける人のありけるに、満盛は恋の題なんあてられける。さてかくなんよみてつかはしける。「はつせ山七日こもりて祈らなんわがものおもひの花ざかりなり」。またいかなる時にかありけん、「つどひたる□とないひそ秋風にあはれをしりて荻はつくるを」。かりそめにかく口ずさびたる哥ながらいと心ふかく哀なり。

819 明居 (102・303・418)

富の門ぬし、あるやごとなき御方の賀の屏風に名ある人々の歌かゝせられけるとき、明居ぬしは香久山のかたにて郭公のなきゆくところなりければ、「郭公なきゆくみれば香久山の榊にこゑの玉もかくらむ」。かくよみて書つけられたりける。いとめでたくなん。

820 明代 (414・817)

檜井居のあるじ弥生のころ、友だち一人二人ともなひて別荘なる庭にあそびけるころ、築山のもとに池水に魚のあそぶをみて、から人の魚楽といひけんもかくや、などうちまもらひたるに、友どち哥ひとつあらまほしとせちにこひければ、「底ふかき池の松藻は水の民ゆきの道のしをりなるらむ」。また千載の花の木の中に、鶯のこゑうるはしうなくをきゝて、「この春も老せぬこゑのうぐひすは花の木かげになければなるらん」。かくよみけるとぞ。

821 茂樹 (710)

材月園のあるじ、夏のころ下つふさの国へ行けり。そこにありけるこゝろ勝間田の池見にといでたちけるに、道にて日は暮たり。されど夜をおかして池のほとりにいたるに、このごろのあつさに水かれて池とおおぼえず。興さめてかへりがてら、「てる日には底もひわれて月か

げの水もやどらぬかつまたの池」。この歌いみじうをかしとて、其名をちこちにきこえければ、あるやごとなき君のきかせ給ひて御前にめされて、題給はりて哥よませられけるに水といふ事を、「よる浪の花さく時もあらじかし世にうもれ木のうもれ水には」。かくなんよみてたてまつりければ、いみじうめでさせ給ひけるとか。また旅にありける頃、入月といふ題にて、「てりながらくるゝ月ぞうかりけるうつろひてこそ花はちりしが」。おなじ頃、朝霜といふ題にて、「野べみればはつ霜おきぬさを鹿の妻恋草も今はかれなん」。かく心にまかせてよみいづる歌、いづれも秀逸なるは堪能の人とこそいふべけれ。

822 影芳 (609)

一樹園ぬし過しころ難波にのぼりける時、かしこにありてよみける歌、「国見せしなにはの池に竈所得て蟹もゆたかにかしきなすらし」。おなじ頃、ものいひかはしゝ女ありけり。しのびてよばひたるそのあけの朝、「心にもあらぬへだてのかなしきは妹をそがひにかへるきぬ」。女いみじうかなしと思ひけるとぞ。

823 寛元住

姓源、名秋宜、字叔徳、通称菊田泰蔵。別ニ金英園、秋宜園、大順堂の号あり。国々県の令に属して所々に郡丞たる事年あり。をさなくして父を喪ひ、母の手ひとつに人となりけるが、母和歌を好み早くより芳宜園翁に従ひて老行末迄ものせられけるに、元住幼時よりいつしかといざなはれて歌よみならひけるが、天性おろかなる身になしうべき事かとはと、三十近く成て思ひ絶けるものから猶名残の忍ばるゝに、さらば狂歌をこそもてあそばめとて六樹翁のをしへ子となり、それより十とせ余をへて文化の末つかた判者の列に入。其後飛驒の郡丞に移りしよりこのかた、年々に公務事しげくなりけるまに、此十とせ計がほどはふつに怠りけるが、今とし仕を罷め薙髪して名を日宜と改、下総葛飾須田堤の辺にさゝやかなる庵引結びて閑居し、庵の名を撫性

庵と号し窓に菊堀植て逸窓と呼。今はた昔の枯草ほりいで、今様のみやびを加へ、余命の養ひ草にせんと思ひおこしつ。さらに檜の園生さては蓬がいはいのわたりあなぐりさまよひて、不死の薬をさへこひ求るになんありける。本性悠長にしてもの毎にはかゝしからず。伎芸をいはゞ弓ひき馬に跨るすべ少しばかり、さては七弦の琴ちと計かき鳴すまでにて外に能なし。さて母なりける人、老後に及びてわれも狂歌よみ見んとである日、元住家に人々つどひて松間月といふを題にて歌よみける時かたへによりゐて、老の目に髭のはえたる顔と見る松の葉越の月のかつら男、とよまれたるを、其日の秀逸とは評せられき。又ある時風のこゝちとて床にやすらはれけるに元住、母の肩もみさりなどしつゝ四方山のこと草かたらひあへるなへに、漬物にあらねど人の孝行は親をおもしとするが肝心、と口ずさびければ、母やがて、老らくの身にははりよりあんまより気をもまぬこそ葉也けれ、などよまれたる事もありき。かゝるはかなきことわざかりそめに書つくるにも、たゞ忍ばるゝは十とせあまり五とせばかりさきつこしかたにこそありけれ。「雲のゐる岑とあふがん庭桜霞の泪に花さける日は」。

付、収録小伝者国別一覽

陸奥国

101 緑千条「伊藤千条(509)」・310 菊安・407 千卷堂天楽・409 静居・506 永良・603 実成・604 光房

出羽国

111 和学真名富「真名富(704)」・608 守鷹・815 真鷹

越後国

308 山路菊寿躬・504 瑞々・809 鏡磨安・810 真砂

常陸国

108 国史園・110 国翠園繁樹

上野国

802 朝日輝高・806 津田詮村・

下野国

302 善野真袖・402 釈思文・812 手引糸屑

上総国

410 山田稻城・709 泉清浄・804 滝守

下総国

102 檜集園明居「富田明居(303・418)」・明居(819)」・104 吾妻春郷・106 津多井万世・107 桂花門・406 椿園長住・512 唐居・513 文世・

東都

601 茂木広善(702)・813 千代松成・823 寛元住
105 高殿梅明・301 守川捨魚「捨魚(510)」・313 輝雄・405 敷嶋枝道
「枝道(701)」・411 千秋・412 蟹子磨・413 山道明平・415 満盛(818)・
501 霰音高・607 胤雄・707 鶯光世・708 徳賀・710 太山茂樹「茂樹
(821)」・801 芦原田鶴・807 明信

武蔵国

109 見奴琴喜吉「沢泉舎喜吉(306)」・喜吉(703)」・113 袂広好・
503 月明一・609 桂影芳「影吉(822)」・711 光郷・803 窓雪・805 秋田
広海

尾張国

401 加藤琵琶彦「琵琶彦(606)」・502 友雄・706 紀真和

伊勢国

304 神風音信

美濃国

307 堀田俊豊・404 亀雄(816)

飛驒国

311 秋良・808 土川明宗

近江国

408 吉住琴雄「琴雄(507)」・811 釈照信

摂津国

416 兎雪・705 玉江真舟

河内国

605 真青

和泉国

103 秋夜長樹「齡長樹(814)」・309 正樹・508 綾成

阿波国

305 梅里・417 手束盧橘・505 千船友風「友風(602)」

無記載

112 檣柱亭寄躬・312 呉竹直喜・403 台星子痴囊・414 寺井明代「明
代(817・820)」・511 船盛・514 為明

【補記】

『諸家小伝録』各編小伝集の部の翻刻を許可された、初編所蔵者の福島県立図書館、四・五・七・八編所蔵者の仙台市博物館、六編所蔵者の徳島県立図書館各位に感謝します。